

目次

	ページ
第3回都市計画研究会(LRTとまちづくり)	1
「LRTとまちづくり」に関する見学会 ・ 松山市伊予鉄道	2
四国地区にける見学会と懇談会'06	4
農村計画シンポジウム(地井先生追悼講演会)	5
ひろしま自転車トーク2007	7
支部連携事業 - 中国・四国リレーシンポジウム “公共空間とまちづくり” - について	9
会員からの寄稿 森保洋之氏(広島工大)	10
山下和也氏(地域計画工房)	11
会員紹介 ・ 井上矩之氏	12
編集委員 ホットコーナー ・ 福馬晶子氏	13
今後の活動計画	15
編集後記	15

第3回都市計画研究会(LRTとまちづくり)

日時：平成18年10月7日(土) 15:10~17:30

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ

LRTとまちづくりをテーマとして、広島電鉄株式会社の田口氏と、中国地方総合研究センターの佐藤氏を招いて開催された(参加者39名)。

テーマ1「日仏協力会議への参加とフランス諸都市の都市交通視察」

田口依久夫(広島電鉄株式会社 総合企画グループ交通企画チーム公共交通担当リーダー)

日仏協力会議とフランスのトラムを中心とした国レベルの交通政策の説明があり、次に先進都市の視察状況が写真を中心に報告された。



発表のポイントは次の通り。

- (1) 日仏協力会議は、2002年1月に、当時の扇国土交通大臣とフランスの共和国設備・運輸・住宅大臣との間で、ITS、都市交通、海洋汚染防止、航空・鉄道事故調査の4分野について専門家会合を開催していくことで合意された会議である。田口氏が参加したのは、パリでLRTをテーマとして開催された第3回目の会議。
- (2) フランスの公共交通政策の特徴として、交通基本法(LOTI)と交通負担金(VT)の説明があった。1982年に成立した交通基本法では、「人は誰でも移動する権利

を有する」という交通権が認められており、各地方自治体は公共交通の運行を義務付けられている。公共交通のインフラ整備には、国から手厚い財政補助があり、開業後の運賃収入で建設費を出そうとする考えはない。しかし、運営費や車両に対しては補助金がなく、その財源確保として交通負担金制度がある。交通負担金制度とは、地方自治体が従業員10名以上の企業から、給与総額の一定割合(最高1.8%)を税金として徴収するものでVTと呼ばれる。

- (3) トラムの運営収支の状況は、フランス国内で路面電車・トラムが運行している14都市の平均で、収入内訳〔料金収入20%、VT41%、自治体からの補助37%〕、支出内訳〔運営費71%、その他29%〕となっている。
- (4) 先進都市の視察報告が行われた。報告では、ストラスブール、ボルドー、リヨン、パリおよびルーアンの事例が紹介された。このうちストラスブールについては、次のような報告があった。

ストラスブールの交通政策は、徒歩・自転車・公共交通を中心としたまちづくり。

トラム導入の背景が説明された。1960年代に約300kmあった路面電車をすべて廃止し道路整備へと転換 交通渋滞が大きな問題 1985年メトロ整備計画 1989年市長選(メトロ派对トラム派で後者が当選) 1994年トラムA号線完成。選挙で交通政策が争点となるのが特徴的である。

そのほかに、車両、停留所、ロケーションシステム、芝生軌道、電車優先信号、トランジットモールなどの説明が行われた。

テーマ2「中枢都市の都心活性化とLRT化」

佐藤俊雄 中国地方総合研究センター地域計画研究部長)

前半で中枢都市広島役と都心の役割が紹介され、後半では中心都市に必要な都心と交通機能について発表された。

発表されたポイントは次の通り。

- (1)現在策定準備中の広域地方計画のメインテーマは地方の自立であり、広島は中国地方の自立を支える最大の都市である。
- (2)広島の役割は経済的・行政的な中枢性を備えているだけでなく、文化面での中枢性を備えていることであり、そのような文化中枢性の5割強が都心に集中する。
- (3)また都心は新たな産業育成の母体であり、各種の文化資本も存在し、創造都市性を備えている。
- (4)広島の課題は広域集客力が低下していること、都心の集客力も低下していることであり、これが商業面だけでなく、産業創出力・中枢性・都市の創造性の低下に波及することが懸念される。
- (5)都心に必要なのは、空間的自由度や発見・ハブニング性である。これを空間的に捉えると、歩行回遊性と公共交通アクセスがポイントである。そのような観点から4年前に広島の都心のあり方について具体的に提言したが、その考え方は広島市の都心ビジョン、交通プログラムにも継承されていると考えている。
- (6)トランジットモールの社会実験の動向をみると、この実現のためにはNPOによる気運盛り上げ、商業者の推進体制、迂回道路での交通渋滞緩和策がポイントである。
- (7)また、都心への通過交通を削減するため、ロードプライシングも有効であり、オスロの例を見ると、市民は当初反対していても、その効果が見えるにつれ、賛成が多くなっている。
- (8)路面電車はまちづくりの支援効果があるとされるが、人口50万人クラスの都市と100万人クラスの都市では、その役割に差があると考えられる。前者は中心部強化の交通まちづくりという意義があるが、後者ではブロック中枢性を支える専用軌道系並みのサービスという水準が求められる。
- (9)こうした観点からみると、広島の路面電車はまず、JR広島駅から都心へのアクセシビリティ改善を進めるべきである。そして次の段階で、トランジットモールをロードプライシングと同時実施すべきである。これらを進めていく上でのカギは、意志決定システムである。

(文責：加藤文教)



「LRTとまちづくり」に関する見学会

- 松山市伊予鉄道 -

日時:2006年11月11日(土)13:00~16:30

プログラム:

1.講演会

「松山市の都市づくりと都心部公共交通計画」

愛媛大学 柏谷 増男

「伊予鉄道グループのICeカード事業について」

株式会社eカード 西野 元

2.現地見学会

大街道(「坂の上の雲」関連施設、ロープウェイ街他)

市内電車 道後

参加者:15名

1.講演会

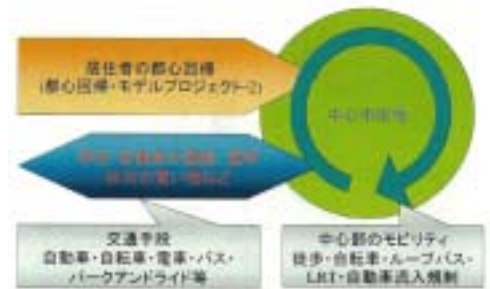
「松山市の都市づくりと都心部公共交通計画」

愛媛大学大学院理工学研究科教授柏谷増男氏から「松山まちづくり交通計画」、「松山市オムニバスタウン計画」、「松山駅周辺整備事業計画」など、計画内容の紹介を中心とした「松山の都市づくりと都心部公共交通計画」についての講演があり、活発な意見交換が行われた。

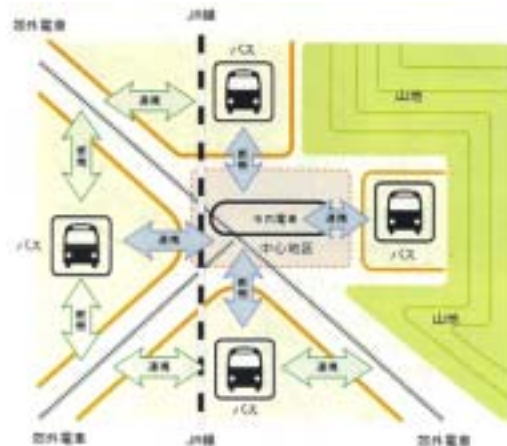


松山市のまちづくりと公共交通機関の考え方

松山市では、中心部においてコンパクトシティの概念を取り入れた「歩いて暮らせるまちづくり」構想を立て、これを支える交通計画を実施している。市内電車(LRT)は、都心内のモビリティとして重要な役割を果たしており、郊外部からの流入交通を担う電車、バスとの連携をいかに上手く行うか、自転車とどう連携を図るかが重要な課題となっている。



概念図



公共交通概念図

公共交通機関の利用動向

他の地方都市と同様、昭和40年代からのモータリゼーションの拡大により、公共交通機関の利用者は平成12年には最盛期に対し、郊外鉄道が44%、市内電車が39%、バスが14%と大幅に低下したが、伊予鉄道の「サービス向上宣言」、「いきいき交通まちづくり宣言」や「松山市オムニバスタウン計画」等による、運賃値下げ、路線再編、施設の更新・改良、ロケーションシステムの導入、バリアフリー化などの各種の施策を行うことによって、郊外鉄道は微増、バス利用者は3~4割増と著しい効果を上げ、都心での回遊を高めるなど、松山市の活性化に役立っている。



カードは、プリペイド方式と、百貨店のクレジットカードに乗車券機能をもたせた方式の2種類あり、両者あわせて27万枚販売されている。

また、携帯電話でのサービスも実施されている。

カードには、定期券機能、1日乗車券機能、普通乗車券機能、鉄道とバスとの乗り継ぎ機能が準備されている。

平成18年9月から45店舗で、カード利用によるメリットを受けられる仕組みができ、平成18年10月から高知方面への高速バスでカード利用の実験を行っている。

今後は、広島松山間の船舶への拡大や観光客等の一見客に対するカードサービスの展開を図る予定である。



「伊予鉄道グループのICeカード事業について」株式会社eカードの西野元氏から伊予鉄道のICeカードについての現状と今後の方向性についての紹介があり、意見交換が行われた。



ICeカード事業は、松山市オムニバスタウン事業、松山市「坂の上の雲」まちづくり事業等の行政側の計画と連携して、伊予鉄道が平成16年~20年を計画期間として実施している「いきいき交通まちづくり宣言」の中の交通IT化の推進事業として実施されているものである。

ICeカード事業は、昨年8月から実施し、約1年が経過した。現在のカード利用率は約50%であり、郊外電車、市内電車、バスを合わせて72,000人が利用している。

バスについては、ICカードの導入により降車時間が短縮され、オフピーク時にはPTPSの運用と併せ、定時性が確保されるようになった。

市内電車は、歩車分離信号化などの影響もあり、カード導入による効果は明確ではない。



カード

2. 見学会

ロープウェイ街、坂の上の雲記念館、ロケーションシステム等の見学を実施した。

秋山兄弟生家



ロープウェイ街



坂の上の雲記念館



カード



バスロケーション



カード読取器(市内電車)

(文責：山根公八)

四国地区における見学会と懇談会'06

(地域活動助成事業)

平成18年11月15日、毎年恒例となりました四国地区における見学会と懇談会が、国土交通省四国地方整備局建政部のご協力のもと、高松市内で行われました。テーマは「中心市街地活性化」です。当日の様子をご報告します。

1. 見学会

場所：高松市丸亀町市街地再開発事業

時間：13時30分～14時30分

11月15日(水)13時30分、さわやかな秋晴れの中、JR高松駅コンコース内に集合した参加者一行は、バスで丸亀町商店街に向かいました。



現地では、高松丸亀商店街地区第一種市街地再開発事業 A 街区(高松三越周辺)の見学が行われました。建設途中の再開発ビル内で、事業の概要ならびに建築物について説明がありました。平成6年に再開発準備組合が設立され、平成13年には都市計画決定、平成14年に再開発組合が設立され、この年には対象地域周辺が都市再生緊急整備地域にも指定されました。その後、実施計画が策定され、平成18年完成を目標に工事が進んでいます。

A 街区は「出会い、賑わい、おもてなし」を基本コンセプトに、ヨーロッパの古いまちなみを参考に設計されています。再開発ビルは、A 街区の中核をなす建物で、西棟と東棟に分かれます。1～3階部分は商業空間で、既に営業を始めている店舗もありました。4階部分は集会施設等のある共用部、5～9階は共同住宅となっています。西棟と東棟の結節点にはドームが建設される予定になっています。再開発ビル1階部分には最新式の自動駐輪場が設置されており、参加者の関心を誘っていました。



(左上：三越付近 右上：再開発ビル内での説明会
左下：建設中のドーム 右下：自動駐輪場)

2. 懇談会

場所：サン・イレブン高松

時間：15時00分～17時30分

見学会終了後、高松市内の香川県土木建設会館隣りのサン・イレブン高松に場所を移し、懇談会が行われました。

まず、四国地方整備局建政部の岩城豊部長、徳島大学ソシオテクノサイエンス研究部の近藤光男教授より、開会の挨拶、懇談会の趣旨、会の内容についてご説明があり、その後、参加者の自己紹介が行われました。当日は国交省職員だけでなく、大学教員、学生、建設コンサルタント、喫茶店主の方など多くの方にご参加いただきました。懇談会では、渡辺、島、西野の三氏により、テーマに関連した話題提供が行われました。

(1)「植生の大気浄化度を指標とした市街化シミュレーション」(徳島大助手 渡辺公次郎)

渡辺からは、植生の大気汚染ガス吸収量を制約条件に用いた市街化シミュレーション手法の開発について研究事例報告が行われました。会場からは、市街化予測モデルの内容、交通問題との関係、評価する都市開発施策について質問がなされました。

(2)「中心市街地活性化計画に関する事例報告」(集環境計画代表取締役 島博司)

島氏からは、徳島市中心市街地活性化基本計画の概要と中心市街地活性化の課題について講演がなされました。

(3)まちづくり三法見直しについて(国土交通省四国地方整備局建政部都市調整官 西野仁)

西野氏からは、まちづくり三法(都市計画法、大店立地法、中心市街地活性化法)の改正について、その経緯、改正点、その狙いについて講演がなされました。

話題提供の後、参加者との議論が行われました。会場からは、なぜ中心市街地ばかり優遇されるのか、郊外部の開発を規制しすぎているのではないのか、市場主義の原理には従うべきではないのか、これからの中心市街地の機能はどうあるべきか、活性化をどう考えればよいのか等、参加者同士で熱い議論が交わされ、予定時間を20分ほど超過して終了しました。



(左から渡辺、島、西野)

気がつけば周囲は既に暗くなっており、高松駅前のクリスマスツリーを眺めつつ、参加者の一部は懇親会会場へと足早に向かっていました。



(文責 徳島大学・渡辺公次郎)

農村計画シンポジウム(地井先生追悼講演会)

日時 平成18(2006)年12月2日(土)13:30~17:00

会場 広島工業大学広島校舎 201室

(広島市中区中島町5-7)

主催 (社)日本建築学会中国支部

共催 (社)日本都市計画学会中国四国支部



本シンポジウムは、世界的な広がりを見せる近年の異常気象と、これに起因すると考えられる自然災害の状況を踏まえ、農山漁村地域における災害復興を考えることと、農村計画分野で多くの業績を残され、昨年他界された地井昭夫先生のご業績を検証することを目的として、3部構成により行われた。



総合司会の熊野稔氏

第1部 農山漁村地域での災害復興を考える

第1部では、4名の研究者により、近年の農山漁村地域での災害復興の状況についての報告がされ、その後、一括して質疑応答が行われた。以下、その概要を紹介する。

重村 力(神戸大学) 「中越提言の考え方ならびにジャワ島中部地震災害の現状」

中山間地域の保全是その地域だけではなく国民的課題であること、などについて説明があり、集落の孤立への備え、住宅と公共施設の耐震補強、コミュニティ単位の仮設住宅の整備など、中越地震等の教訓を踏まえた20項目の提言が紹介された。



また、ジャワ島中部地震の教訓として、建築物とりわけ住宅における壁の重要性、伝統工法(竹造)の仮設住宅の研究、教育的情報の必要性等が紹介された。

内田文雄(山口大学) 「まちの中心部の再生計画と中越地震・十日町市・川西地区のまちづくりを事例として・・・」

構想段階から、住民参加方式により人口8千人の川西町の賑わいの拠点づくりの整備に関わり、段階的に整備を実施していたさなか、中越地震に遭遇。古い道が迂回路として活躍、非構造部分の被災による公共建築の利用が制約されることなどが指摘され、雁木等の伝統的空間による地域再生の必要性と、自ら設計した賑わい拠点が果たす役割への期待が紹介された。



岡田知子(西日本工業大学) 「地震復興のあり方 玄海島の事例からー」

玄海島の復興は、災害に強いまちづくりの名の下にハード整備が急がれ、地域のソフト力が無視された。このため、まだ使える住宅や石垣が取り壊されたり、合意形成に十分な時間をかけずに4m道路網の整備計画が決定されたり、といったことに対して、早期復旧は達成できるが、災害に強いまちづくりが達成できるかとの疑問が投げかけられた。



石丸紀興(広島国際大学) 「地震による集落景観の変容から新たな対応を考える」

鳥取地震や芸余地震の復興を例として、復興住宅といえども、デザイン的な配慮が必要であることや、石垣などの地域独自の景観再生の必要性などが指摘された。その上で、今の美しい風景を写真に残すことが、被災後の復旧、復興の際の指針(動機付け)になるのではないかと提言がなされた。



【質疑応答】

質疑応答は、玄海島の復興計画に集中した。

- ・ 玄海島について、住民はどんなビジョンや要望を持っていたのか。住民と学会の間で対話の場がなかったので不明。行政から聞いた話では災害に強い、と、早くとのことだった。
- ・ 市のアドバイスだけで住民は決めたのか？ yes
- ・ 異論あり。行政には多少違う意見もあったが、都市公団がコンサルに書かせた。石積みの撤去は問題と思うが、その他はどこが悪いのか。数年たてばなじむデザインではないか。
- ・ 委員長経由のコミュニケーションというやり方に限界があったのではないかと。長い年月をかけて形成された集落の風景が人工的になってしまった(ex.石がコンクリートに)。地震を契機に歴史の連続性が絶たれた。これまでの集落研究の成果が活かされていない。
- ・ 下水道工事などで石垣の下の部分を削るため、石垣の強度が弱くなる。石垣がコンクリート擁壁となるが、コンクリートに囲まれた道は暑い。
- ・ 壊す必要のないものまで壊したことが問題。斜面市街地の再生方法はほかにもいろいろある。
- ・ ここは歩いて住めるまちづくりこそ重要。180台分の駐車場が必要か？そもそも考え方がおかしい。
- ・ スピード、継続性、負担等を総合的に判断することが必要。修復型の提案には敬意を表すが、ここは大都市近郊であり、早期復旧が最重要課題。

第2部 農村計画における地井昭夫先生の業績を振り返って

第2部は、1分間の黙祷から始まった。その後、コーディネーターの石丸先生より、地井先生のプロフィールについて紹介され、地井先生にゆかりのある6名のパネリストによるパネルディスカッションが行われた。

パネリストの方から、大学時代お世話になったこと、集落調査で一緒したこと、ドイツやイタリアにも造詣が深かったこと、現場主義を貫かれたこと、図面や模型を丁寧に作られていたこと、文章にリズムがあり読みや

すいこと、空間だけではなくそれを支える仕組みを大切にされていたこと、集落を生命体と捉え「発見的方法」という新たな理論を構築されたことなど、地井先生の様々な功績や思い出、さらに貴重なスライドなどが紹介された。

第3部 地井昭夫先生を偲ぶ会

17:30 から、地井先生の奥様と2人のご子息、さらに広島市の秋葉市長もご出席され、地井先生を偲ぶ会が開催された。

会の冒頭に秋葉市長が「広島市公共事業見直し委員会」の座長としての地井先生のご功績に感謝の意を表され、地井先生からいただいた提言を紹介された。その後、参加者が思い思いに地井先生との思い出話を披露した。



秋葉市長(左)と地井先生のご家族

地井先生のご功績の偉大さと関係者に与えた影響の大きさに改めて驚いた次第である。農山漁村の再生は国土計画や都市づくりにとって古くて新しい課題であるが、生活者や生業の担い手不足を始め、集落存続の危機的な状況は年々深刻になっていると認識している。しかし、農山漁村あるいは中山間地問題の解消が、国民的課題というよりある種「負の課題」(消極的課題)として論じられることの方が多く感じられる。このことは、都市をふるさととし、一見農山漁村と無関係に暮らしていると錯覚している人が増えていることと無関係ではあるまい。地井先生のように、真に農山漁村を愛し、真正面から取り組むことの大切さを改めて痛感した。

(文責:佐伯達郎)



パネルディスカッションの様子

左端はコーディネーターの石丸氏、パネリスト(石丸氏の隣より):重村 力氏(神戸大学) 森保洋氏(広島工業大学) 篠部 裕氏(呉高専) 山下和也氏(地域計画工房) 林 康文氏(広島県庁) 宮本 茂氏(中国地方総合研究センター)

ひろしま自転車トーク 2007

“広島市をもっと自転車の利用しやすいまちにするにはどうしたらいいか”ということを中心に、専門家や地域のキーマンから様々な情報を提供頂き、会場の参加者を交えたパネルディスカッションを行いました。当日の様子をご報告します。

日時：平成19年1月20日(土)13:00～17:00

会場：広島市まちづくり市民交流プラザ6階
マルチメディアスタジオ

主催：(社)建設コンサルタンツ協会

後援：(社)土木学会中国支部

(社)日本都市計画学会中国四国支部

プログラム

第一部 話題提供「自転車まちづくりのススメ」

第二部 調査報告「広島市における自転車利用ニーズの実態」

第三部 パネルディスカッション「ひろしまの自転車環境づくり」

第一部：話題提供『自転車まちづくりのススメ』

須藤敦司(NPO法人日本都市計画家協会「自転車まちづくり」研究会代表、エコまちづくりフォーラム株式会社代表)

自転車愛好家で「自転車まちづくり研究会」代表でもある須藤氏から、専門家と利用者としての立場から話題提供をして頂きました。

主催者からの紹介後、須藤氏は自転車に乗って颯爽と現れました。50歳とは思えない若々しい印象です。講演内容は、はじめに自転車都市に必要な要素として、「人の意識」、「自転車の性能」、「利用環境の基盤」、「システムや法律」を挙げられ、これらについて興味深い事例や実験結果、また、自転車を活かしたまちづくりについて、分かりやすく説明して頂きました。

[要旨]

- ・ 自転車が持つ効用は、“環境負荷が少ない”、“健康的である”、“経済的負担が少ない”、“使い勝手がよく機動性が高い”、“ふれあいがもてる”などがある。



- ・ 都心から都市計画家協会(約8km)の所要時間を様々な交通手段で実験したところ、1位がクロスバイク、2位が鉄道+折畳み自転車、3位がママチャリ、最下位がバスだった。

- ・ 自転車は車道の左を走ることが基本だが、緊急措置的に歩道を走ってもよいとされている。道路空間を自動車、バイク、自転車、歩行者、沿道がどのようにシェアし、共存していくかが課題となっている。

第二部：調査報告『広島市における自転車利用ニーズの実態』

高田禮榮(建設コンサルタンツ協会中国支部)

主催者の建設コンサルタンツ協会高田氏より、広島市中心部で実施したアンケート結果について報告を行いました。自転車を利用する人や歩行者、また、自転車を受け入れる店舗など、自転車を取り巻く様々な視点からのアンケートが行われ、専門家の視点からの分析が行われました。

[要旨]

- ・ 受け入れるまち側(店舗側)は、自転車利用の今後の進展のためには、行政による駐輪場整備が欠かせないと感じている。
- ・ まちを訪れる市民側には、歩行者と自転車の2つの立場がある。歩行者の立場としては、放置自転車や自転車の危険運転にマイナス印象がある。一方、自転車の立場としては、低コストや自由度の高さに自転車の有効性を感じる反面、駐輪場についてコスト面と利便性にマイナス印象を持っている。
- ・ 自転車利用の拡大のためには、短時間無料駐輪場の整備と法的取り締まりの強化が必要である。



第三部：パネルディスカッション『ひろしまの自転車環境づくり』

専門家や地域のキーマンをパネリストとして、それぞれの立場から話題提供をして頂きました。その後、須藤氏や会場の参加者を交えてディスカッションを行いました。

パネリストからのお話とディスカッションの様子を以下に示します。

砂本文彦(広島国際大学社会環境科学部助教授)

- ・ 坂の多い呉で電動自転車の実験を行った結果、電動自転車を取り入れることで、市民の移動環境が大きく変化する可能性があることがわかった。
- ・ フライブルクを中心市街地には、路面電車が走り、水

路も流れている。自転車の通行が規制される一方で、歩くことが楽しい環境が整備されている。また、中心市街地で自転車利用を制限する一方で、郊外では自転車から路面電車への乗り換えがしやすいよう配慮されている。

- ・ 自転車に乗る理由の多くは、楽しんで便利に移動できることであり、自転車利用者に善意やルールを求めることは困難で継続が難しい。
- ・ 『自転車の不便さと歩行者の楽しみは同じところから生まれる』ことから、よりよい自転車利用のために「歩いて楽しいまち広島」を作ることが大切。下井良昭(広島市並木通り商店街振興組合理事長)
- ・ 規制により、アーケードの不法駐輪は減ったが、一方で、並木通りの不法駐輪が多くなった。
- ・ 店の周りにイスやテーブルを置くと、不法駐輪が無くなる。カラーコーンが役所の管理のようなイメージを与えるのに対して、イスやテーブルは店の敷地というイメージを与え、置きにくくなるのかも知れない。
- ・ アーケード内では、時間帯の自転車通行規制をしているが、あまり守られていない。規制の内容がちゃんと理解されているか疑問である。また、厳しい取締りも行われておらず、決めたことを徹底することやアメとムチが大切である。

向井政博(広島市道路交通局次長)

- ・ 電停近くと100m道路に路上駐輪場を設置している。電停近くの駐輪場は常に100%に近い利用率である。
- ・ 市営駐輪場は4800台、民間駐輪場は2400台が収容可能で、現在7~9割が利用されている。一方、現在の不法駐輪は約1000台で収容する容量は十分にある。
- ・ 不法駐輪の撤去作業費だけで膨大な費用がかかっている。今後はソフト的な対策が必要と考えられる。
- ・ 自転車利用者が求めるのは、中心部に無料でアクセスできることだが、中心部に新たな駐輪場をつくることは難しい。規制区域の周辺に無料の駐輪場を整備して、少し歩いてもらう等の対策も検討する必要があると考えている。

増田泉子(中国新聞論説委員)

- ・ 都心部の自転車問題は出尽くしている。いつも駐輪問題からはじまるが、自転車利用へ議論を移すべき。
- ・ 広島市内の駐輪問題については、買い物客よりもオフィス街の通勤者の不法駐輪が多いと思われる。
- ・ 電車の中での携帯電話の使用が減っているように、「これをやると格好悪い」という環境を作ることが重要。福岡市では自転車取締まりの『チャリエン』が活動している。若い女性でコスプレしており、インパクトがあり十分な広報となっている。
- ・ 自転車利用の問題は、自転車単独では解決できず、歩行者、自動車等一体的な対策が必要。その他、法

律的な問題(自転車の通行位置等の曖昧さ)、リーダーシップ不在等がある。



パネリスト：左から増田氏、向井氏、下井氏、砂本氏



意見交換

会場：オフィス街の空き地、空きテナント、地下スペースは駐輪場にならないか？

向井：パルコ、東急ハンズは来客者用の駐輪場を設置している。オフィス街の空き地や市街地のテナントは地価や賃貸料が高く、コスト的に困難。

下井：いきなり離れた場所に撤去するのではなく、平和大通りに一時撤去場所を設けることはできないか？取締りの費用が減って、また、取締りも徹底されることで、意識付けができるのでは？

向井：一時駐輪場の設置場所として100m道路が適切かどうかは疑問。

会場：自転車に乗ることが楽しくなるまちづくりが必要。通勤者、ビジター、高齢者、レジャー、健康など色々な面から市民を交えて進める必要がある。

須藤：我々を応援団として、広島市の自転車利用マスタープランを作って欲しい。

おわりに

会場アンケートを集計したところ、「参加して良かった。今後も参加してみたい。」という方が約9割を占めました。一方で、「机上論で終わらせないための具体的な方針を聞きたい。」という意見もありました。建設コンサルタンツ協会中国支部では今後も引き続き、自転車の利用促進に向けた検討を行い、よりよい“自転車都市ひろしま”にむけた活動を行いたいと考えております。(文責：久家幸一郎)

支部連携行事 中国・四国リレーシンポジウム “公共空間とまちづくり” について

平成18年度・19年度において、本部より支部活動の活性化や社会連携の推進に関わる取組(支部連携行事)に対する助成(最大100万円)があります。

中国四国支部では、昨年7月及び9月に標記に関する企画書を本部に提出し、理事会において承認されました。

<テーマ>

中国・四国リレーシンポジウム“公共空間とまちづくり”

& “市民街づくり相談コーナー”の開設

4都市(松江市、岡山市、徳島市、高知市)において、“公共空間とまちづくり”を共通の切り口としてシンポジウムを開催するとともに、4都市でのシンポジウムを総括する形で、全体的なシンポジウム(広島市)を開催し、特色や課題、提言などをまとめ、発信する。

シンポジウムでは、「市民参加のあり方」「維持管理、占有的な活用をどうするか」「空間・環境効果(防災、景観、美しさ、利用しやすさ...)」は何か、「どんな方法があるか」などを掘り下げるとともに、「どんな活用・利用ができるか(アイデア・メニュー)」も引き出す。

また、シンポジウム開催日(広島市...)に市民街づくり相談コーナーを開設する。

<開催概要>

松江市 - 水辺の景観・活用・治水 -

日時：2007年3月10日(土) 13:30~17:00

会場：国引きメッセ(松江市学園南1丁目2番1号)

資料代：300円

担当責任者：熊谷昌彦氏(米子高専)

松江市は古くから水の都として親しまれ、西に夕景の名所宍道湖、東に中海が広がり、両湖を結ぶ大橋川を挟む形で市街地が形成されている。そこで、生態学的意味の水辺空間のあり方を景観・活用・治水と関連させ住民と語り合うこと。

プログラム(予定)

支部長あいさつ

島根県知事または松江市長の挨拶

基調講演「都市水害リスクからみた安全安心な地域づくり」神戸大学教授 大西一嘉氏

基調講演「インターフェースとしての水辺空間 - オランダの事例紹介 - 」米子高専助手 田口陽子氏

松江市の水辺のまちづくりに関する説明(松江市)

シンポジウム

大西一嘉氏(神戸大学)

田口陽子氏(米子高専)

松波龍一氏(都市計画学会中国四国支部会員)

國井秀伸氏(島根大学教授、汽水研究センター長)

林 教英氏(松江ホテル旅館組合長)

森口 保氏(地域研究家、元産業考古学評議員)

コーディネータ：熊谷昌彦氏(米子高専)

岡山市 公共空間と歴史遺産を生かした岡山市のまちづくり(仮題)

開催予定：2007年6月頃

担当責任者：阿部宏史氏(岡山大学)

概要(予定)

基調講演(講師1名)

パネル討論

まちづくり懇談会(行政、大学、建築士会、NPO法人、市民団体など)

徳島市 - 水辺の空間活用とまちの魅力・元気づくり(仮題)

開催予定：2007年7月頃

担当責任者：近藤光男氏(徳島大学)

概要(予定)

講演1(講師：NPO法人新町川を守る会から)

魅力的なまちづくりと元気な市民活動 - 新町川を守る会のボランティア活動 -

講演2(講師：徳島県建築士会から)

水辺空間の景観整備に向けて - ひょうたん島・景観まちづくり事業 -

講演3(講師：国土交通省から)

個性あふれるまちづくりの推進 - まちづくり交付金の活用 -

見学会(ひょうたん島一周クルーズと川から見た都市景観の視察)も検討中

高知市 - 高知の「日曜市」をテーマ(予定) -

開催予定：2007年9月頃

担当責任者：大谷英人氏(高知工科大学)

概要(予定)

検討中

広島市 - 中国・四国の現場に学ぶ公共空間とまちづくり -

開催予定：2007年11月頃

担当責任者：松波龍一氏(松波計画事務所)

概要(予定)

4都市におけるシンポジウムの報告

広島市における事例報告

総括パネルディスカッション「公共空間からのまちづくり」まとめ

交流会(スタンドカフェ形式、参加者スピーチ、参加費無料) 街づくり相談コーナー

日時・会場：シンポジウム(広島市...)会場と同一会場(別室または同室)にて10:00~12:30 開設予定

担当責任者：松田智仁氏(広島市)

対象の対象：概ね5年以上、街づくり活動に取り組んでいる市民団体、中国四国9県内の活動団体

ねらい：市民活動支援(具体のまちづくり活動への学会等の貢献)、他の機関との連携(街づくり相談コーナー開設のプロセス、実施を通じて他の団体との連携)、街づくり相談結果等の情報発信・提言(結果を公表することにより、地域情報の発信やまちづくり促進の提言とする) (文責：山下和也)

会員からの奇稿

【広島工業大学・環境学部・地域環境学科・開設記念・講演会(卓話会)】**地域環境学の話(Part 1)～新しい“地域環境づくり”を考える～**の実施結果報告

広島工大では、環境学部の中に、新たに「地域環境学科」を、平成18年4月に開設した。これを記念して、この度、地域環境学の話 という講演会(卓話会)を、同大学・同学部・地域環境学科主催で開催している。

その<Part 1>は、平成18年10月7日(土)13時～16時に、ウエスト・プラザ(広島市中区の紙屋町交差点近く)の5階・会議室にて、新しい“地域環境づくり”を考える と題して、地域環境学科の4人の教員が講演した。全体的に具体の例を交え、分かり易く、まさに机(卓)を囲んでお話した次第である。参加者は、一般市民、高校生、その保護者、大学生、行政職員、コンサルタント、まちづくりボランティア、設計事務所、等々で、参加者総数は38名であった。以下、私なりの内容のまとめを報告したい。

その新設の「**地域環境学科**」は、地域の自然と生活・文化・歴史に根ざした(行政的な)都市や、(地理的・文化的な)地域のあり方の追求を理念とし、次の3分野を柱として構成している学科である。その3分野とは、「都市・地域・景観計画分野」、「地域社会計画・管理分野」、「地域・生活文化分野」であり、順に“創る”“育む”“守る”という学びの内容といえる。現場の体験学習を重視した「フィールドワーク」を実施し、環境に配慮しつつ新たな地域社会を創造する人材を育成するために、ハード・ソフトの両面から専門知識や専門技術を修得する新学科である。卒業後の資格は、公務員、技術士(補)、再開発プランナー、建築士、等々で、云わば、主として、都市計画技術者やまちづくりプランナーとしての活躍の場・場面を想定・期待している。

当日の講演の内容は次の通りである。まず、森保から主旨説明を含めて挨拶。その後、卓話として、青山吉隆教授が、「地域環境学 - 人と環境に優しい地域をめざして - 」と題して講演。地域環境学の目的は、多目的であり、持続的に発展し、アメニティ豊かな地域の形成にある。その範囲は学際的である。その構成は総合科学であり、調査・評価・政策・合意形成・等々が大事。環境首都は人と自転車が主役。自動車依存都市からの脱却、低環境負荷・静穏化型交通の政策的展開、安心・安全な町の形成が必要。等々の話あり。次いで卓話として、上嶋英機教授が、「海・川・山における“地域環境づくり” - 景観・生態系などの自然環境の保全と再生 - 」と題して講演。地域は、生命地域と解釈すべきだ。瀬戸内の自然海岸・干潟・藻場・等の減少と、その回復への努力の必要。生態系の循環性の認識。環境を診断・評価・管理することの大事さ。沿岸情報からのマッピング、沿岸域再生プロジェクトの始動。等々の話。休憩後、卓話として、三村泰臣教授が、「環瀬戸内海の桃源郷構想」と題して講演。同一文化圏としての環瀬戸内海地域という認識。陶淵明の「桃花源記」から、「桃源郷」

は、美しい自然環境、ゆったりとした景観・町並み、高齢者福祉社会、オープンな社会、新しい地域環境、等々を有すると解釈。環瀬戸内海の「桃源郷構想」としての、伝統芸能を取り入れた海域・流域の新たな地域環境構想。等々の話。続いて卓話として、脇田祥尚助教授が「宮島のまちづくり - 広島工業大学“地域環境宮島学習センター”の試み - 」と題して講演。宮島に広島工大が同センターを設置した経緯の説明。その拠点としての町家の特徴。それを地域活動拠点として活用する“フィールドワーク型教育”の実施。地域に開かれた教育・研究への指向。地域との交流を通しての新しいまちづくりへの展開・提案、等々の話あり。最後に、上嶋英機教授が挨拶を行い全てを終了した。

総じて、1講演：30分+質疑：10分という構成であったが、分かり易く、しかも密度の濃い講演会になったように感じている。終了後の参加大学生・ほかの感想は次に通りでであった。「地域環境」が、これからのキーワードの一つだと感じた。自然環境からみた「地域環境学」の話しが新鮮であった。同じ課題に関して、講師の先生方が話すことにより、先生方のスタンスが良く分った。人にも環境にも優しい「地域づくり」の意味と、その達成の大事さの確認。海・川・山・まちなか・等々で何が起きているのか?についての理解と、今後の目配せ・対応の必要。

「現実社会における理想郷」「アメニティ」「持続可能性」「環境共生・循環型社会の形成」等々の追及の大事さ。低成長社会、少子高齢社会でのまちづくりの模索・提案の必要。「地域環境宮島学習センター」の積極的活用。終了後、自由に発言・質問、等が出来る機会の提供。「講演会」の前後に、講演内容に関する「パネル展示」を行い、講師の教員のゼミ生も参加して説明すると分かり易い。講師の教員、そのゼミ生、講演会の参加者、等々と「相互対話・交流」の機会の提供。より広範囲な地域人、企業人・行政人等と、学生、教員等々との「人的交流、活動の協働性」の必要。等々であった。これらについては今後に活かしたい。なお、<Part 2>は、2月3日(土)13時～16時に、今回と同会場で、他の4教員ほかが担当する。内容の詳細は、広島工大のホームページ(HP)の中の【地域環境学科のHP】をご覧の上、事前申込みされたい。以上



卓話 の講演風景

(文責 森保洋之)

会員からの奇稿 (会員の出版情報)

書名：ヒロシマをさがそう 原爆を見た建物

発行：西田書店

定価：1,400円+税

主な書店やインターネット
で購入可

昨年9月に、上記の本を上梓
しました。

著者は、広島平和記念資料館
が発行した「ヒロシマの被爆建
造物は語る」(1996年)の編纂担
当であった叶真幹(広島市)と、
それに参加していた井手三千男(写真家、2006年6月没)及
び私の3人です。

「ヒロシマの被爆建造物は語る」は、被爆建造物を集大成
した“記録”としての役割を担っています。今回の本は、
その一部を反映させながら、頁数と費用が限られた中で、
小さな本で何が出来るかを考えてつくりました。

高校生をはじめ若い世代に読んでもらえるようにしたい。
ポケットに入れて、街を歩けるようにしたい。
被爆する前、どんな街があったのか、それがどのようにな
ったかを伝えたい。

そして、本づくりの問題意識は、

「1発の爆弾で、広島は廃墟となった。

あれから60年、情報の渦の中であらゆることの忘却が
日常となった日本社会において、被爆者の忘れることができ
ない体験は、戦争を知らない若い世代の心に今も響いて
いるのであろうか。

被爆者がいなくなったとき、原爆の記憶を後世に伝える
力はこのこされているのであろうか。

(中略)

しかしなにより被爆者とともに、原爆を体験したのは、
数多くの建物そのものである。

(中略)

建物を保存し、意味を継承しようとするれば、様々な問題
をクリアしなければならぬ。

しかし最も大切なのは、原爆を見た建物の価値を共有し、
記憶を伝える力を引き出すことだ。

記憶を伝える力とはなんだろうか。

被爆や戦争体験のない人、その建物を初めて知る人、若
い世代が、あなたが、建物や場所を通じて、そのとき自分
がここにいたらどうなっていたか、と想像すること。

被爆前にどんな街と暮らしがあったのか。

原爆で街と暮らしはどう変わったのか。復興はどのよう
になされたのか。(後略)」(巻頭：「ヒロシマを想像して欲し
いより」)

現在、残っている非木造の被爆建物は37件、建物の一
部(壁など)がモニュメントなどとして現地で保存・展示し
てあるものは14件となっています。また、消えた非木造
建物は105件あります(現時点で把握しているもの)。



この本では、こうした非木造建物を中心に、建物の歩み
を写真と文章、リストで紹介しています。さらに、一部で
すが、木造の被爆建物(現存するもの56件、民家等は除く)
の一部も掲載しています。

図 被爆建物の分布



本の構成(目次の概略)を紹介します。

ヒロシマを想像して欲しい

8月6日、朝の広島 - 原爆投下

広島はどのような街だったのか

被爆した建物を見て歩こう(デルタを7つに区分し紹介)

消えた被爆建物

帰っていく場所 ヒロシマ

ヒロシマの道標とは

この本では、被爆建物を“道標(みちしるべ)”にたとえ
ています。

「被爆前の街の姿と暮らしを伝え、被爆前後の歴史をつなぐ
道標(道標)。

被爆時において、逃れ、人を捜した道標。

被爆直後の救護や腹腔を支えた道標。

建築・空間を通じて被爆の実相と体験を伝える道標。

刻み込まれた記憶を読み解き、想像して、未来を考える
道標。

道標を頼りにヒロシマを歩こう。ヒロシマをさがそう。」

おわりに、著者の一人である故・井手三千男氏が仕事と
して最後に撮影した県立広島商業高等学校を紹介します。



県立広島商業高等学校の
玄関にある旧校舎のステ
ンドグラス。

旧校舎は1934年の完成。
広島出身の日本最初の金メ
ダリスト・織田幹雄がモデル
では、

(文責：山下和也)

会員紹介

福山大学工学部建設環境工学科 井上 矩之

本来の専門は交通工学。昭和40年代初期に、揺籃期の名神高速道路や阪神高速道路の交通管制システム整備にかかわり、渋滞現象・旅行時間予測・交通流監視機器配置・制御の理論をまとめて京都大学工学博士の学位を頂いた。



昭和63年4月に福山大学に転勤。交通需要が多すぎ困る関西。交通需要が少なく、交通施設整備もままならず、さらに衰退していく中国地方。交通問題のいくらかが工学的対策のみで解決できる関西と解決できない中国。地域振興と交通が一体化した計画が必要である。数学を使う交通工学の狭い領域から、民俗・民話・歴史・心理学などを使用する都市・地域計画の広い領域に研究が広がっている。以下に将来にかけての関心をいくつか紹介したい。

第一は父性、母性両原理の調和したまちづくり。福山は工業中心の産業都市。工業系企業活動が活発になるようなまちづくりが大切。いわば理系のまち。しかし、その対極の文系の要素が釣り合っていない。経済的には豊かでも、精神的に豊かでない。経済性、効率性といった論理性追求いわば父性原理に加え、文化、美しさ、癒しといった感性追求いわば母性原理の調和したまちづくりを考えたい。

第二は文化資源を活用した地域振興。何年か前に熱海温泉で同窓会。同じ大きさの松の並木。一本だけ人だかり。よく見るとその松には看板がある。この松の下で貫一がお宮を蹴っ飛ばした！物語が客を呼ぶ。中山間地域に民話を掘り起こしあるいは創作し、地域振興が出来ないか。

第三は遊歩道の整備。経済重視の戦後の国づくりを象徴するのが高速道路整備。時は金なり、出来るだけ速く通り過ぎたい道、時間無限小の道。時間節約型道路。対極が出来るだけ長くいたい道。時間無限大の道。時間消費型道路。ウォーキングは健康によい。ある設計の道は認知症に、また別の設計の道は生活習慣病に効く。高齢社会の健康への土木工学の貢献。土木医学か健康土木工学が出来ないか。

第四は原風景に出会う場の整備。人類の遠き祖先が海に誕生、陸に上がり山間で採集・狩猟、平野に出て農耕、今都市に移った。山の緑は誰もが好き、風呂に入れば誰もが安らぐ。海と水、山と木、田と稲の三代の原風景の場を一日生活圈か一週生活圈の中に整備、心の安らぎを得たい。

第五は道州制に向けての中国州の一体化。数ある中で一番将来が不安。北海道の日本ハム、九州のソフトバンク、東北州の楽天ファンは他地域チームを圧倒し、地域内全域に分布。広島ファンは・・・何故？歴史的・文化的一体感の欠如が最大理由でないか。昔、中国地方全域に分布した大国主あるいはスサノオ信仰。温泉治療と植林の神話。少子化、高齢社会、環境に関して現代的意義あり。

この他、製造業のまち福山での物流研究や、万人にある鬼の心を自ら退治する土木的ハード・ソフトの整備の研究も諦めていない。最近、産学官連携の街道ルネッサンス、とるば、私の好きな道、景観評価などの委員会に参加、いろんな分野の人々と議論し合う機会が増え楽しみである。

会員からのまちづくり寄稿文募集中

まちづくり寄稿文・募集要綱

- テーマ
まちづくりに関するトピックス、提言など
- 応募資格
日本都市計画学会会員(学生会員の方、歓迎です)
- 応募方法・提出方法
 - ・ 枚数はタイトル、本文等を含めてニュースレター1ページ分(2,500文字程度、写真等を含む)です。
 - ・ ワードプロソフト(ワード又は一太郎)で原稿を作成し、データを提出先までメール送付してください。
 - ・ 郵送の場合、CD、MO等に保存の上、媒体を郵送してください。
 - ・ 送付の際には、住所、所属、氏名(ふりがな)、年齢、連絡先電話番号を明記してください。
- 提出先・お問い合わせ
日本都市計画学会 中国四国支部事務局
〒730-0041 広島市中区小町4-33
(社)中国地方総合研究センター 佐藤
TEL 082-245-7900 FAX 082-245-7629
E-mail: c-plan@crrc.or.jp

応募原稿は、原則として返却いたしません。
応募いただいた寄稿文は、ニュースレターに順次掲載しますが、応募者多数の場合など掲載できない場合がありますので、予めご了承ください。
氏名、所属は、公表されることを前提としてください。
今回の目的以外で個人情報を使用することはありません。

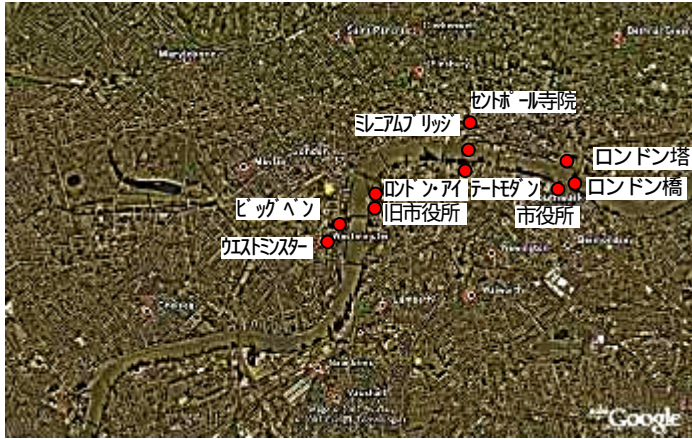
編集委員 ホットコーナー かわりゆくロンドンの散歩

福馬 晶子

2005年の夏に行ったので、少し情報が古いかもしれないが、ロンドン紀行を寄稿する。

ロンドンと川

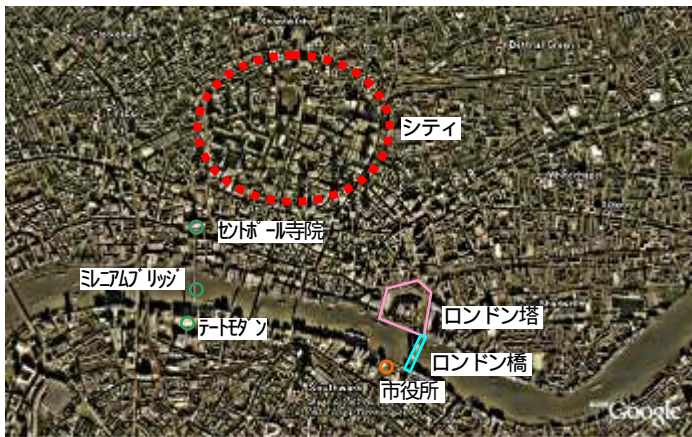
ロンドンに行くと、川がまず気になる。



イギリスの首都ロンドンは、ローマ時代から2000年近く続く町だ。1世紀にローマ人が城壁都市ロンドンウムを建設したのがその起源とされている。

やはりテムズ川を運河とした水運の拠点だったのだろう。歴史が、テムズ川沿いの至るところに、古い建物などとして現れる。

ロンドン発祥のシティと呼ばれるエリアが中心地で(今も世界的な金融の中心地として栄えている)その東の端にロンドン橋がテムズ川にかかり交易の中心として発展。



つれ、牢獄、拷問、処刑の場として、最終的には陰謀の決着をこっそりつける場として、親戚や姉妹同士で暗殺・処刑・幽閉などの場として使われた。なるほど、磔をした場所や、首を切った場所、未だにペットとして飛べなくしたカラスを飼っているなど、おどろおどろしいところである。その向かいがサウスバンクだ。



ロンドン橋を渡ったら、まずは、市役所がある。なんじゃこりゃ。ノーマン・フォスター作です。中が螺旋上に上がっていて、使いにくいと、公民館なみに使われているそうです。隣には、空気で膨らませた風船の中に入るインスタレーションがありました。



名所旧跡と、現代建築と、その前の広場で素っ裸で水と戯れる子供。面白い。



その脇にロンドン塔が、城塞として出来た。元は完全な城塞で、火薬などを保管していたようだが、時代を経るに



市役所前の広場は、ギャラリーになっている。このときは、世界の風景を空から撮ったものを展示していた。川向こうのシティの面白い形をしたオフィス群が眺められる。葉巻型宇宙船のようなオフィスビルは、やはりノーマン・フォスター設計のスイス・リ・本社ビル。地元では、ピクルス(キュウリの漬物)と呼ばれている。周辺には、工場のようなリチャード・ロジャーズのロイスオブロンドンビルなど、なんじゃこりゃな建築物満載。でも、昔ながらの商店街もあるというこの不条理。

こちらは昔からの棧敷だったところで、シェークスピアの活躍したグローブ座も、このテムズ川河岸にあった。



左はグローブ座跡地。全く持って駐車場。そのうち発掘するのだそうだ。右は現在復元されたグローブ座。木造だそうだ。棧敷の見世物小屋にしては立派だったんだ。

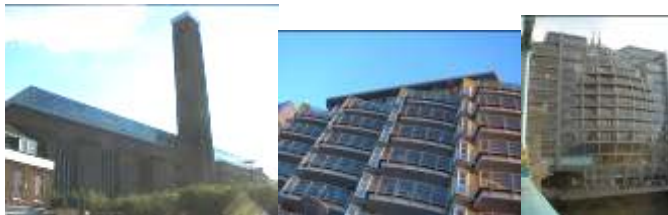
グローブ座もそうだが、歩行者用の河岸緑地を歩いていくと、現代建築や近代建築などが川に向かって花のかんばせを競っている。



ビッグベンと橋と河岸緑地を歩く人、人、人。



ビッグベンの向かいには、昔の市役所(今は水族館や美術館やら多目的施設)と、ロンドン・アイというこれもなんじゃこりゃの大観覧車。全周が透明なので、空を飛んでいるようです。やはり、航空会社(英国航空)の作。公的資金は投入されていないそうです。ダリの足の長い象もあります。なんじゃこりゃ。



昔の工場が再利用されて、現代美術館になっています。(テート・モダン)。川に向けて建っている共同住宅は、流石、雁行にするなど、日本でやりがちな豆腐型ではありません。オフィスビルも多いのですが、それぞれインパクトがあります。

歴史物が様々なところに物語を語っている。



道も河岸ばかりを通っていない。曲がったり、大航海時代の船の周りを回ったり、古い遺跡を覗いたり、潜ったり。体験型だ。



勿論、広場がある。官公庁施設街のビルの足元に大きな広場があるのは良い。子連れがはしゃいでいたり、ぼんやりとしたサラリーマンがいたり。大道芸人もそこかしこに謙虚に行む・お金を渡すと、動き始める芸などが多い。



オープンカフェがそこかしこにある。あらこんなところか?といったところにもある。



河岸緑地のすぐ裏に、公営住宅がある。河岸が工業団地だったことに関係か?



川だけに、橋も満載。これは2000年を記念して作られたミレニアムブリッジ。エリザベス女王が渡ったときに揺れたため、暫く通行禁止になったいわれ付き。しかし、骨でできたような現代技術と有機物のあいこのような雰囲気が良い。

今回は、ふれあい街歩き風にテムズ川沿いぶらり歩きを紀行文として出してみました。気軽に、都市を楽しむ。ありがたいことですね。自分のまちをこうしてみたいとおもっちゃいますね。



今後の活動計画

都市計画研究会シンポジウム LRTと街づくり

日時：2007年2月3日(土) 13:30~14:30

会場：広島市まちづくり市民交流プラザ 研修室C

主催(共催)：日本都市計画学会中国四国支部

土木学会中国支部

<プログラム>

基調講演:演題「トラムを中心とした都市交通戦略の最前線(仮)」

講師：松中亮治 氏(岡山大学大学院助教授)

パネルディスカッション「LRTと街づくり～中国四国地方の新たな発展を目指して」

コーディネーター：杉恵頼寧 氏(広島大学大学院教授)

パネリスト：阿部宏史 氏(岡山大学大学院教授)

高井広行 氏(近畿大学工学部教授)

佐藤俊雄 氏(中国地方総合研究センター
地域計画研究部長)

山根政則 氏(広島LRT研究会代表)

コメンテーター：松中亮治 氏(岡山大学大学院助教授)

日本都市計画学会中国四国支部 平成18年度第1回学術講演会 - 都市計画と教育 -

テーマ：都市計画・まちづくりに求められる人材とは(仮)

日時：2007年2月17日(土) 13:00~15:00

会場：広島市まちづくり市民プラザ研修室ABC

広島市中区袋町6-36

参加費：無料

プログラム

【基調講演】

講師：延藤安弘 氏

(特定非営利活動法人 まちの縁側育くみ隊 代表理事、愛知産業大学大学院教授)

【話題提供】

『浦安市におけるまちづくりの教科書づくり』

講師：横堀肇 氏(広島大学大学院教授)

主催(共同開催)

日本都市計画学会中国四国支部学術委員会

「ひろしま まちづくりフォーラム実行委員会」(広島県建築士会まちづくり委員会・日本都市計画学会中国四国支部等が参加)

<第2部>

まちづくりフォーラム2007(同会場)

<第3部>

合同の交流会とし、意見交換と懇親

(会場は近々決定)

第2部・第3部の主催は「ひろしま まちづくりフォーラム実行委員会」

特別講演会(功績賞受賞記念講演会)

石丸紀興氏の功績賞を記念して

テーマ：検討中(これまでの業績に関するテーマなど)

日時：2007年3月7日(水曜日) 18:00~20:00

会場：コンフォートホテル(中国電力本店北隣)

講師：石丸紀興 氏(広島国際大学教授)

2007年度・第5回通常総会・研究発表会

日時：2007年5月19日(土)

会場：広島市まちづくり市民交流プラザ(予定)

詳しい内容については、次回のニュースレター等でお伝えします。

「2007年度研究発表会募集要項」

(社)日本都市計画学会中国四国支部 第5回研究発表会

日時：2007年5月19日(土)

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ(予定)

発表内容：都市計画に関する研究、報告、調査、紹介、論説等(実用性の面で都市計画に寄与する実務報告や実践報告も歓迎いたしますので、奮ってご応募ください。)

応募資格：発表者は学会員であること。連名者は非学会員でもよい。ただし、委員会が認めた場合は、発表者が非学会員でもよい。

問合せ先：〒739-8527 広島県東広島市鏡山1-4-1

広島大学院工学研究科 社会環境システム専攻
桑野将司

電話&FAX 082-424-7825 E-mail アドレス

kuwano@hiroshima-u.ac.jp

申込期限 2007年2月26日(月)

原稿提出 2007年4月13日(金)

申込み方法、原稿執筆要領、当日のプログラム、発表方法、開催場所等の詳細については支部HPをご覧ください。

<http://www.crrc.or.jp/c-plan/>

編集後記

一月も足早に過ぎようとしています。例年のことながら年の始まりは時が早く刻んでいるようにさえ感じさせます。ところでこの年末年始に、広島市中心部では恒例の「ひろしまドリミネーション」が開催されました。官民が協働で平和大通りなど都心部をライトアップして、市民や観光客が夜の都市空間を楽しむ光の祭典です。私も帰り道に足を運んでみましたが、そこには心温まる賑わいがありました。人々を誘う幻想的な“輝き”に、まちづくりのヒントがあるような気がします。今年も宜しく願います。

(周藤浩司)

編集委員：周藤浩司(編集長)、佐伯達郎、佐藤俊雄、隅田誠、高田禮榮、長谷山弘志、福馬晶子、宮迫勇次、安永洋一郎、山下和也